

〔臨床〕

口角部に発生した類表皮嚢胞の1例

小松崎悟郎*, 加藤 元康*, 柴田 敏之*,
有末 眞*, 安彦善裕**, 賀来 亨**

* 北海道医療大学歯学部口腔外科学第II講座
** 北海道医療大学歯学部口腔病理学講座

* (主任: 有末 眞 教授)
** (主任: 賀来 亨 教授)

A case of epidermoid cyst occurring in the lateral angle of mouth.

Goroh KOMATSUZAKI*, Motoyasu KATO*, Toshiyuki SHIBATA*
Makoto ARISUE* Yoshihiro ABIKO**, Tohru KAKU**

* Second Department of Oral Surgery, School of Dentistry,
HEALTH SCIENCES UNIVERSITY OF HOKKAIDO
** Department of Oral Pathology, School of Dentistry,
HEALTH SCIENCES UNIVERSITY OF HOKKAIDO

* (Chief Prof Makoto ARISUE)
** (Chief Prof Tohru KAKU)

Abstract

A case of epidermoid cyst occurring in the lateral angle of mouth was reported. A 24-year-old female visited our hospital with a complaint of swelling in the right angle of mouth. Physical examination revealed a small well-defined and movable soft mass in this region. The mass was enucleated under local anesthesia and histological diagnosis of epidermoid cyst was made.

The progress of this lesion is favorable with no sign of recurrence.

Key words .epidermoid cyst, oral cavity, lateral angle of mouth,

緒 言

頬表皮嚢胞および頬表皮嚢胞は、一般に胎生期の外胚葉組織の迷入,あるいは後天的に外傷,手術などによる上皮の迷入により発生するといわれ,身体各部(頭部,頸部,腹部,肛門,卵巣など)に発生することが知られている¹⁾。しかし,口腔領域では比較的まれな疾患であり,口腔領域に発生した例の多くは口底に生じ,口唇,口角部に生じた例の報告は少ない^{2,5)}。今回,我々は口角部に発生した稀な頬表皮嚢胞の1例を経験したので,その概要を報告する。

症 例

患 者: 24歳,女性。

初 診: 平成8年7月8日。

主 訴: 右側口角部の腫脹。

家族歴・既往歴: 特記すべき事項なし。

現病歴: 平成8年5月初旬頃より右側口角部の腫脹を自覚したが,症状が無い為放置。6月末になり友人に同腫脹の存在を指摘され意識するようになり,触れていたところ,接触痛が出現し当科受診した。

現 症:

全身所見: 体格は中等度,栄養状態は良好,他に特記すべき事項は認められなかった。

局所所見: 顔貌は左右非対称性で右側口角部に直径約8mm程の軽度発赤を伴う腫脹が認められた。触診により,軽度圧痛を伴う弾性軟の可動性腫瘤が認められた。(写真1)。

臨床診断: 口角部腫瘍の疑い。

処置および経過: 軽度発赤が認められたため,

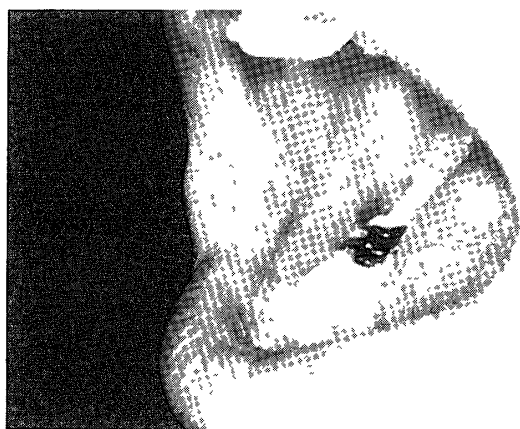


写真1 初診時局所所見

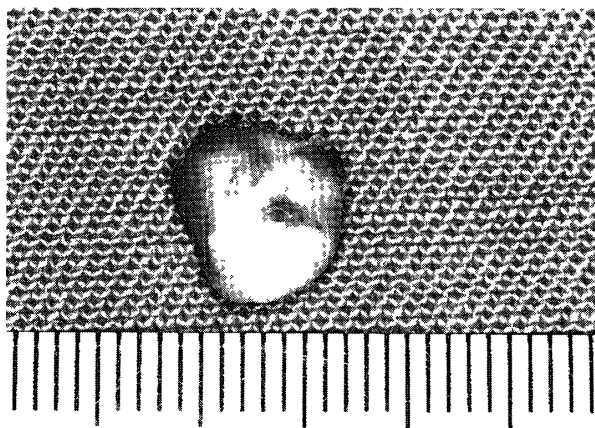


写真3 摘出物

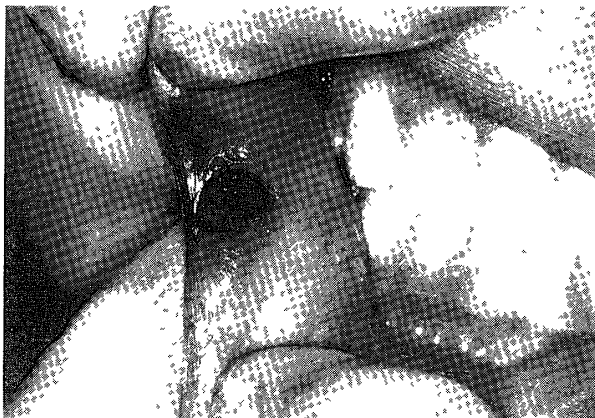


写真2 摘出時所見

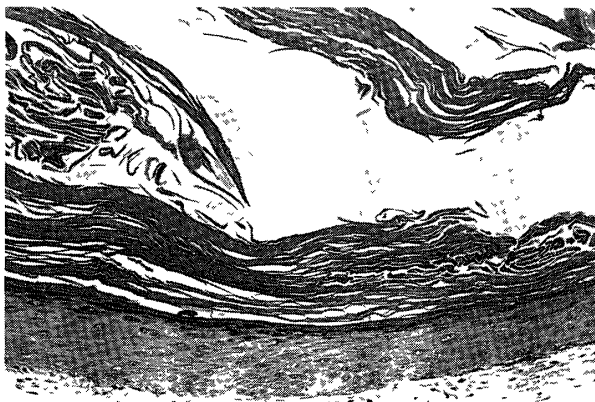


写真4 病理組織像 (H-E染色)

消炎療法を行った後、平成8年8月2日、局所麻酔下に腫瘤の摘出術を施行した。口腔粘膜側の腫脹部中央に約6mmの横切開を加え、周囲軟組織より鈍的に剝離し、腫瘤を一塊として摘出した。この際、腫瘤と皮膚及び口腔粘膜との癒着は認められなかった(写真2)。摘出物は直径約8mmの類球形を呈し、平滑な被膜で被われ、黄白色を呈していた(写真3)。内容は灰白色の豆腐粕状を呈し、毛髪などは認められなかった。**病理組織的所見**：組織は嚢胞様構造を呈し、嚢胞壁は過角化を伴った重層扁平上皮に裏装されており、その外側に線維性結合組織が認められた。しかし、皮膚付属器などは認められなかった。また、嚢胞腔内は角質物で満たされていた(写真4)。

病理組織診断：類表皮嚢胞

考 察

類皮および類表皮嚢胞は、外胚葉の陥入によって生じる嚢胞で、頭頸部領域のみならず胸部、背部などの体表面や腹腔、卵巣などの体腔内にも生じることが知られている。また、分類としては、Meyer⁶⁾の行った以下の病的分類が一般に用いられている。すなわち、嚢胞壁に毛髪、皮脂腺、汗腺などの皮膚付属器を有するものを類皮嚢胞、嚢胞壁に皮膚付属器を持たないものを類表皮嚢胞とし、さらに、嚢胞壁に皮膚付属器以外の骨、筋肉、消化器などを含んでいるものを奇形腫とする分類が用いられている。一般に口腔領域では、類皮もしくは類表皮嚢胞がほとんどであり、このうち類表皮嚢胞の頻度が高いことが知られている。全身における本嚢胞の発生頻度について、New¹⁾らは1495例を調査し、肛門部、卵巣部が好発部位であり、頭頸部に発生したものは、103例(6.94%)と比較的稀であることを報告している。本邦の口腔領域での類皮および類表皮嚢胞の発生頻度を検討した1979年の大野ら²⁾の報告によると、口腔

領域の軟組織に発生した嚢胞に占める割合は、6.6%(46例/700例)と低く、特に口唇に発生したものは0.9%(6例/700例)と稀であった。さらに、1939年より1988年までの50年間に本邦において報告された口腔領域の類皮あるいは類表皮嚢胞435例を検討した武富ら³⁾の報告によると、発生部位として、口底が307例(70.7%)と最も多く、次いで顎骨内44例、頬部37例、口唇24例と口唇に発生する例は稀であった。以上のことより、自験例のように口角部に発生した例は極めて稀であると考えられた。

口腔軟組織に発生する類表皮嚢胞と鑑別を要する疾患として、血管腫、線維腫、脂肪腫などの良性腫瘍、炎症性疾患および粉瘤腫などが挙げられる。このうち特に粉瘤腫との鑑別は重要であり注意が必要である。

一般に粉瘤腫は真性粉瘤と仮性(貯留)粉瘤に区別され、後者が毛嚢、脂腺から貯留嚢胞として生じ、前者は表皮の真皮内迷入によって発生し、表皮のみを壁とする類表皮嚢胞と、皮膚の付属器を含み毛髪をも生じる類皮嚢胞の2種類がある⁷⁾。このうち、仮性粉瘤は皮膚に関連して発生する腫瘍であり、毛嚢または皮脂腺の貯留嚢胞であるため、皮膚と癒着している場合が多く、比較的容易に鑑別される。一方、真性粉瘤との鑑別は臨床的にも組織学的にも困難である。このため、粉瘤腫では臨床的に皮膚と癒着している場合が多いことより、摘出時の皮膚との関係により診断されている^{4,7,8)}。自験例の場合、嚢胞と皮膚との癒着は認められず、摘出に際し皮膚および嚢胞壁の穿孔も認められなかったことにより、粉瘤腫ではなく類表皮嚢胞と臨床的に診断した。

本嚢胞の発生機序に関して、Bergman⁹⁾の胎生期の鰓弓癒合部への外胚葉迷入によるという鰓弓説、Hassel¹⁰⁾の頸洞の異常埋没説など先天的病因説など諸説があり、いまだ明らかにされていない。また、Anderson¹¹⁾、Ackermanら¹²⁾は、

一般には先天的な病変であるが、外傷、炎症、手術など後天的原因により生じることもありと述べている。自験例の場合、外傷、炎症、手術などの既往がなかったことより、後天的原因により生じた可能性は少なく、先天的原因により生じた可能性が高いと考えられた。また、口角という発生部位を考慮すると、第一鰓弓より分化してきた上顎突起と下顎突起の癒合部の迷入上皮に起因し、類表皮嚢胞が発生した可能性が推察された。

結 語

24歳、女性の右側口角部に発生した類表皮嚢胞法の1症例を経験し、その概要を報告した。

引用文献

- 1) New, G B, Erich, J B Dermoid cysts of the head and neck Surg Gynecol Obstet 65 48-55, 1937
- 2) 大野邦博, 曾田忠雄, 石田 恵, 伊藤秀夫 口腔領域の類皮嚢胞50例の臨床統計ならびに本邦における文献的考察. 日口外誌25 842-847, 1979.
- 3) 武富晶子, 杉本忠雄, 中村貴司, 他田 浩, 世良

- 玲士, 田尻元宏, 黒川英雄, 梶山 稔 上唇に発現した類皮嚢胞の1例. 日口外誌37 1191-1192, 1981.
- 4) 覚道健治, 荒木春美, 大竹智子, 久保愷修, 虫本浩三, 白数力也 上唇に発生した類皮および類表皮嚢胞の1例. 日口外誌32 1238-1243, 1986.
- 5) 石川梧朗 監修 口腔病理学 I I. 永末書店, 京都, pp401-403, 1990
- 6) Meyer, I Dermoid cysts(Dermoids) of the floor of the mouth Oral Surg 8 1149-1164, 1955
- 7) 樋口謙太郎編 皮膚科学特論. 南山堂, 東京, pp982-983, 1969
- 8) 石川武憲, 森沢宣生, 渡辺義明, 田中昭裕, 乾洋, 吉岡 濟 左側口角を含む下口唇に発症した興味あるEpidermoid cystの1症例-特にコレステリン結晶と異物巨細胞反応からみた問題点について-日口外誌22 406-412, 1976
- 9) Bergmann, E Handbuch der praktische Chirurgie 4auf Bd Stuttgart, 1913, pp976-978
- 10) Hassel, R Die Mundborden Dermoide entwicklungs geschichtliche Diagnostisches und Therapeutisches Beitr Klin Chir 83 332-351, 1913
- 11) Anderson, W D Pathology Vol 2, Mosby Co, St Louis, 1970, pp1679-1681
- 12) Ackerman, L Surgical pathology, Mosby Co, St Louis, 1966, pp99-100